

西  
欧  
の  
対  
話

# 西欧との対話

思考の原点を求めて

阿部良雄

河出書房新社

著者略歴・阿部良雄（あべ・よしお）

一九三二年、東京に生まれる。

一九五五年、東京大学文学部仏文学科を卒業。

一九五八年から六一年までフランス政府給費留学生として、一九六六年から七〇年までフランス国立科学研究所研究員・国立東洋語学校講師としてパリに滞在、ボードルールを中心とするフランスの文学と美術を研究。

現在、東京大学教養学部助教授。

著書、『若いヨーロッパ』（河出書房新社、一九六二年）。

## 西欧との対話

——思考の原点を求めて——

一九七二年七月一五日印刷

一九七二年七月二〇日発行

著者 阿部良雄

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一六

電話（〇三）二九二一三七一一

振替東京一〇八〇二一

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

©Yoshio ABE 1972

定価 七五〇円

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

## 目次

- 1 ● 西洋人との対話——きだみのる先生に—— 5
- 2 ● 怒りと自己批判——リュシヤン・デュモンに—— 17
- 3 ● 言葉・都市・自然——森有正先生に—— 35
- 4 ● 頑固さの必要について——コスタス・パパヨアヌー氏に—— 55
- 5 ● 学問と造反——ティム・クラークに—— 73
- 6 ● もう一つのヨーロッパ——篠田一士氏に—— 93
- 7 ● ヴェネツィア滅ぶべし——バルテュスに—— 119
- 8 ● シャルル・ボードレールの犯罪——ジョルジュ・ブラン教授に—— 133
- 9 ● 新・食人論——E・M・シオラン師に—— 159
- 10 ● 美について何を語ることが出来るか——宮川淳に—— 171
- 11 ● 自然と観照——イーヴ・ボヌフォワに—— 203
- 12 ● 合理主義とは何か——妻に—— 217

注 255

あとがき

273

装帧 = 石岡喜憲 (ICA)

此为试读, 需要完整PDF请访问: [www.ertongbook.com](http://www.ertongbook.com)

# 西 欧 と の 対 話

——思考の原点を求めて——



／・西洋人との対話——きだみのる先生に——



「ぼくたちにしても、美女、秀才、ぜいたく、ケチ、出世、美味など言葉で覚えたものを実際に適用する場合、生活の環境や規模がものをいうことは誰でも知っている。適用すべきものはそこにしかないのだから。このことは翻訳語の多い日本語ではもっと調べる必要がある。」（『にっぽん部落』<sup>1</sup>）

ある人は先生がいつも確信をもって自分の意見を述べられることに対して驚きの意を表したそうです。先生にしてみれば自分の意見を確信をもって述べるなどは当り前しごくのことで、人に対して確信をもって述べられないような意見はそもそも意見の名に値しない、ということになるのでしょう。ところがいま私が自分の身辺を見まわしてみますと、その当り前のはずのことがどうやらあまり当り前ではないのに気付きます。

思えばフランスへ出発しようとする私を激励に先生が私のアパートをお訪ね下さったのは一九六六年初秋、そして帰国後間もなく山にこもってこの本を書き始めた私に声を掛けにお寄り下さったのが昨一九七〇年の夏、その間四年の歳月があったという間に流れ去っていたのですが、時を隔てて

お目にかかる度ごとに、対話の相手として先生をもつことがいかに並々ならぬよろこびであるかを、あらためて感ずるのです。真に確信をもって述べられる意見を聴くことの、さわやかさ。そして、先生のお使いになる言葉の一つ一つが、日本語であらうと、フランス語あるいは西洋古典語からの借用であらうと、常に何らかの現実に対応する先生ご自身の認識・判断に可能な限り正確に対応するように選ばれているということもまた、当り前のようで実は非凡なことであり、そこに先生の確信的な態度の裏付けもあるのだと思います。それに加えて、先生のご意見が頭部だけ（あるいはその一部としての口だけ）の運動によって表出されるのではなく、肉体と精神のすべてを含めた人間としての先生の自信によって担われていることを

感じる、と言えば、對話者としての先生の魅力をほぼ定義したことになるでしょうか。

二度目の渡仏に先立って心構えのようなものを模索していた時の私にとっても、帰国を機に、自分の思索に十年ぶりの里程碑を立てようと手探りし始めていた時の私にとっても、先生との対面はこよない励ましとなりました。それは、本当に自分自身の一部であるような意見をもち、表現することのよろこび、真の意味で思考することのよろこびというものがあるのだという教えを、知らず知らずのうちに先生との接触から汲み取ったからだろうと思います。それは単に頭腦的なよろこびではないのだという意味で、動物的なよろこび、ときえ書きたい気がするのです。呼吸することのよろこびさえ忘れつつあるというか奪われつつある今日のわれわれが、人間動物としての全き生存をとりもどすために回復することの必要なよろこびは数々ありますが、その一つとして思考することのよろこびを是非とも数えなくてはならないと

思います。

われわれにとって外国生活というものはどんな意義があるか。その意義を考える上での鍵になるのはやはり言葉の問題であり、言葉が通じるとか通じないとかいうことに実は大変な深い意味があると悟ったら、それだけでもう外国生活は大変有意義だったと言えるのではないのでしょうか。言い換えれば、ある言葉が適用される対象が何であるかについて無反省的状态から反省的状态へと進むこと、と定義してもよいと思います。

外国生活、というのは、飲んだり食ったりの生活だけでも、われわれの食べている「牡蠣」とフランス人の食べる *huître* とは違うものだと分るというようなことがあって、それだけでも無意味ではない。いや、無意味ではないどころではなくて、そういう発見こそ思考とか言語とかいうものの本質についての反省の出発点ともなり得るかもしれず、あだやおろそかにすべきことではありま

せん。ですが、そういう、言葉、物、自分の三角形で成り立つ静止的・自足的関係から一步を踏み出して、他者の加わった四角形、つまり物への反応を言葉を通じて確かめ合う（あるいは、言葉による伝達を、物への参照<sup>レフェランス</sup>によって確かめ合う）力動的な関係に入るならば、そこにまた全く新たな境地が開けてきます。ここで私が仮に物と名付けたのは、具体的な事物でなくても、それこそ「美味」だとか「美」だとかいう抽象的な指示対象であってもよいので、実はそのところで言葉が通じたり通じなかったり、通じたと思っても相互の理解にずれがあったり、そういうことに気が付き苦労しながら、次第に対話が成り立ち議論が成り立つようになってゆく、そこに外国生活の真の興味が興味もあるのだと思います。

そして、そういう体験の後に、「翻訳語の多い日本語」を用いて行なっているわれわれの思考というものをふり返ってみる時、おのずと新たな視野が開けることは言うまでもありません。そうし

た外国生活の体験というものは、考えてみれば、あらゆる人文科学系の学問の基礎的作業と似通った性格をもっているのです。この夏またお目にかかった時、先生は日本の部落共同体の伝統における「公平」とは何であるかを話題になさいましたが、それは、ソルボンヌで古代社会学を専攻された先生が、西洋古典世界において *aequitas* とはいかなる社会的現実に対応していたのかを考察されるのと全く同じ手続きであって、要するに言葉を知っただけでは何も知ったことにはならないという認識からあらゆる人文科学的探索は出発するのだと思います。

私自身は十九世紀フランスの文学や芸術を研究していますが、この時代のフランス人が用いた言葉を日本語に置き換えただけで分ったことにはならないのは言うまでもなく、それどころか、百年前のフランス人にとって今日のフランス人にとってとでは、同じ言葉が必ずしも同じ意味を持ちはしないという当り前のことを、日を追ってまず

ます痛切に感ずるのです。

しかし、言葉が実際にどのようなに使われているか（使われていたか）を確かめることは、必要な手続きではあっても、生産的な作業ではなく、あくまでも思考の基礎作業に過ぎないことは言うまでもありません。言い換えれば、誤解をできる限り少くするということであって、すべてについて正解に達したところで、何ひとつ創造が行なわれたことにはならない。いや、有限なわれわれの努力によって、たとえ限られた領域に関してでもあれ絶対的な正解に達しようなどと思うことこそ思い上り、傲慢というものではないでしょうか。そして、可能な限りの基礎的作業を行なった上で、自分の限界を意識しつつ自らの責任において意見を堂々と打ち出すこと、これは勇氣というものであって、傲慢とは違います。

ここでまた先生のご著書から引用させていただくならば、あらゆる「既成観念」を排除して事実を観察した上で、自分自身の「偏見或は個人意

見」をもつことの必要を力説しなければならぬのです。そして、自分の「偏見」によって事実を「編集し配列し」そこから「結論を取り出す権利」を自分に認めるということは、他者に対しても同じ事実を違った「偏見」に基づいて「編集し配列し」そこから違った「結論を取り出す権利」を認めるということです。そういう謙虚さがあって初めて確信をもって意見を述べることができるし、謙虚に裏付けられた確信をもつ者同士の間でこそ真の対話が成り立ち、そのような対話を通じてこそ思想の発展が期待できる——人によっては「ユートピア的」と評するでもあろうこの根本的原則を、いくら強調しても強調し過ぎるということはないだろうと思います。

先日、ある任務で一年前から日本に滞在し、夏の休暇をフランスで過ごしてまた任地へ戻ってきたフランスの若い知識人と一夕をともし、新鮮なよろこびを覚えしました。そのよろこびがどう

いうものだったか以下に書くのですが、それを読むと、パリに前後七年も住んでフランスの知識人などというものが珍しくもないはずの人間が今さら何を言うのだ、と評する人があるかもしれない。しかし、少々年をとったりすれて来たりしてもやはり素直に感動するということはあるもので、いや、そうであるだけにその感動は本物ではないかと思うのです。それでは私は何に感動したのか。それは一言で言えば、フランスで現在知識人の置かれている状況について語ってくれた彼が、自分の意見を述べまたこちらの問いや意見に反応するに際して示した、敏速さラピディテとも言うべきもの、そして率直さであります。

それを、フランスの知識人あるいはフランス人一般に対して好意をもたない人の目から見れば、「おっちょこちょい性」ということになるかもしれません。とにかく、そのように良くも悪くも評価できる一つの特徴が、フランスの知識人社会をひとつの魅力的な環境にしていることは、私から

先生に申し上げるまでもないことと思います。異民族との接触、いや総じて他者との接触においては相手のなるべく長所を拾い上げてそれを参考にした方が得であるという原則を立てている私としては、フランス人の判断・反応の敏速さ、表現の率直さを、あくまでも積極的な美点ととりたいたいです。無論フランスの知識人といっても立派な人間もいればだめな奴もいるのはいずこも同じですが、だめな奴は相手にしなければいいので、すぐれた人々だけを問題にするなら、彼らの反応の敏速・率直さというのは、出たとこ勝負的な無責任さを意味するものではないと思います。いや、むしろ逆に、フランスの知識人というのは、常に状況を総合的に判断して的確迅速な判断を下すことが自分の任務なのだという責任を感じており、平素そのような自己訓練を怠らない人間なのだ、と言ってよいのではないでしょうか。

それはある意味では軍人的な責任感、刻々情況の変る戦場で常に自らの責任において決断を下さ

なければならぬ指揮官のそれにも似た意識であると言えるでしょう。そういう意味で、フランス史上最大の二人の政治家ナポレオンとド・ゴールを、ある意味でフランス知識人の典型と呼ぶことは、それほど逆説的ではないと思います。これらの行動的な武人たちと一見対照的な「口舌の徒」たる進歩的インテリたちも、決して自分たちを単なる口舌の徒とは思っていません。「パリを制する者はフランスを制す」したがって自分たちはどれほど少数派であっても権力を掌握することは夢ではないという幻想は、十九世紀にあっては二月革命、先だつては五月革命の挫折によって、その幻想性を明らかにしたはずですが、知識人の思考の習慣からそうたやすく消え去るものではない。知識人の決断と行動が一つの力であり得た対独抵抗運動は、まだつい昨日の記憶なのです。

しかし、フランス知識人の思考・行動型態について社会的・政治的見地から仮説的説明を試みて先生にお目に掛けようなどという大それたことを

考えたわけではないのです。ましてや、知識人が特権階級であつて指揮官意識ももちやすいフランスの社会システムと、ホワイトカラー労働者の一種として一般市民の中に生活的にも意識的にも溶けこんでしまっている日本のシステムと、どちらがより優れているかを論じようというのでもありません。ただ、まず社交的次元だけに限つて論じても、めいめいが常に自分の名においててきばきと判断を下し口にする習慣のある社会の方が、常に自分の属する集団の最大公約数的見解（利益ではありません）は何であるかを考えながらなるべく非人称的に物を言う（なるべく判断を避けて物を言う）習慣の支配する社会よりも、個人間の対話が明快率直に成り立つという点で爽快なものであることは否定できません。「腹を割つて」話すためにことさら酒を飲む必要はないという、人間関係の根本的透明さのようなものがそこにはあるのです。

しかし、ただそれだけのことであるならば、こ

の本の序文としての先生へのお手紙の中でこの話題をもち出すにはおよばなかった。重要なのは、そうした迅速で率直な対話、意見の交換というのが、西欧的思想・学問のどうやら基盤になっているらしいということです。日本の人文科学系学者は知識情報の集積には熱心だが、独自の体系を打ち出したり独創的な結論を引き出すことが不得意であるとは、自他ともに認めるところであるようです。たしかに向こうの学者のやり方を見ていますと、莫大な資料を短時日のうちに渉猟してあとという間に独自の体系を打ち出す、その敏速さというものに私などはおどろかされます。先生のおっしゃる「個人意見」を形成する能力がそこまで発達しているというのは、西欧思想全体のもっているひとつの狂気とも言えるべきものの故ではないかとも思うのですが、今はその問題に触れないことにしましょう。<sup>(1)</sup>ここで私の言いたいのは、そうして率直果敢に打ち出された体系に対してたちまち批判が加えられあるいは対立的な体系が打ち

出されるという風にして学問が発展してゆくその迅速さ、そこには、先ほど論じたフランス知識人の対話における応答の敏速<sup>シビリティ</sup>さに共通な形式<sup>フォーマット</sup>が働いていると思わざるを得ない、ということです。

私は「率直さ」という語を度々使いましたが、西洋人の広い意味での「対話」における態度を定義するために、もう一つ、素直さ *naïveté* という語を使いたいです。それは、ある意味では、西洋人が日本人ほど相手に気を使わないということであって、たとえて言うなら、日本人は自分の意見が白で相手は黒だと思った場合、先まわりして自分の頭の中で混ぜてしまつてねずみ色にして打ち出す、これに対して西洋人はあくまでも白は白として打ち出して、相手の黒と正面からぶつつけようとする。日本人の思いやりは時として陰險さと思われるなら、西洋人の率直さは時として無礼に思われるという次第ですが、西洋人の態度の良さの方に着目して言うなら、その率直さは多くの場合素直さに裏打ちされている、つまり、自分で



正しいと思うことを言うのに何の遠慮もあるものか、という感覚、そしてまた相手に理があればあっさり認めて後にわだかまりを残さない態度がそこにはあるのではないでしょうか。

西洋人相手にそれこそ喧嘩腰で議論をしたら却って後でたがいに親しみが生まれたという式の体験が、近ごろようやく日本人のものとなりつつあるようですが、私に言わせれば、一種そこに子供っぽいというか動物的な素直さがあるからそういうことも成り立つのだと思います。西欧思想の根本にある *dialectique* (対話術、論証法) というものも、対話者同士の素直さがあって初めて成り立つものかもしれません。日本的思考の形式（バグレン）がそれなりの有効性をもつものであることはまた別の問題ですが、相手の意見まで考慮に入れた上で物を言うという態度では、対話が成り立つ前にすでに問題が解決しているか、あるいは、相手の立場も考えた上で物を言っているのだから絶対に譲れないということになって、いずれにせよ対話は成

立ち難く、これを学問の世界にもってくれば、ディアレクティク（Dialectic）の伝統がなかなか育たないということになるのでしょうか。

今からお目に掛けるこの本は、私が三十五歳から三十九歳までの四年間をバリに暮らしながら、西洋人の思考形式を内側から生きてみようとした悪戦苦闘の、一つの記録です。十年前に留学記を発表したとき小田実は、「本人が批判する当の日本的思考・文章のシッポみたいのがあらわれて」と評してくれましたが、この度は「日本的思考・文章」を批判しようなどという意図はさらさなく、むしろ、一匹の実験動物としての私が自分の「シッポ」を堂々とふりかざしているところに、却って意味があるのではないかと思っています。以下のような次第です。

最後に、この本の内容についてちょっと触れるなら、ずいぶん人類の未来に関してペシミストだなと先生はお思いになるかもしれません。事実、